

青少年くらしき

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

12月



「未来のつくり手応援団として」

倉敷教育センター 館長 有森真理 先生のお話を、前回に続いてお届けします。倉敷教育センターは、倉敷市の教員の研修・研究施設で、多くの教員の学びの場です。教育指導に関することはもとより、年々多様化する教育現場に立つ教員に力をつけ、元気を与えることを本務として、有森先生は職務に励んでいます。

有森先生のお話は、「人(わが子)育て」のヒントになるのではないのでしょうか。



「子どもには子どもの理屈
(トラブルは、人それぞれ価値感
が違ふことを学ぶ大事なチャンス)」

セミの抜け殻とダンゴムシのお話をします。一年生を担当していたある日のこと、B男が大きな声で泣いていました。見ると、B男の筆箱の消しゴム入れに、ダンゴムシが十数匹入っています。もともとB男は虫が大の苦手な子でした。これはひよつとしたら誰かのいじめではと心配になり、「だれ、こんなことした人。」と聞くと、ずっとC男が名乗りをあげました。「どうしてこんなことしたの？」

と聞くと、「この前、B男がセミの抜け殻を見つけて騒いどったからもらったんよ。」と言うのです。虫嫌いのB男は、セミの抜け殻さえも怖くて、大声で騒いだようです。抜け殻と言えど虫は虫なのです。さらに話を聞いてみると、C男は、虫が大好きで、B男のおかげでセミの抜け殻を手に入れたこともうれしかったそうです。だから「お返し」をしなければと考え、自分の好きな物は、誰でも同じだと考え、休み時間に校庭中を歩き回ってダンゴムシを捕まえ、B男が席を外した時に、そっと筆箱に入れたようです。サプライズプレ

ゼントのつもりだったということに分かりました。話は聴いてみると分らないものです。すぐに叱らなくて良かったと思いました。学級の中も、最初は、「誰がこんな悪いことをしたん。」と、騒然とした雰囲気でした。しかし、事情が分かると、みんな「へえー、そうじゃったん。」と納得した様子でした。B男を含めてみんなの中で「意地悪なC男」は一転して「優しいC男」になりました。ダンゴムシをあげたC男は、「何でB男が泣くんじゃろう。」と意味が分からなかったようです。「誰もが虫を好きなんじゃないんよ。」と言うと、「へー、そうなん。」と戸惑いを隠せない様子でした。「ぼくはお礼をしたのに、何で泣くんかわからなかった。」多様な価値観があることを知らない子ども同士の間では齟齬(そご)が当然生じます。トラブルが起きた時、自分の価値で判断してしまうのではなく、それぞれの子どもの思いを丁寧に取り、時には通訳のようにして相手の思いを伝えることが周りの大人の大事な役目だと思います。価値観の違いから齟齬が生じるのは、大人の社会にもい



「3つ目のおばけ」 クレパス (令和元年度)

倉敷市立倉敷東小学校1年 岡崎 柑愛 (かな)

火のような「3つのおばけ」にしました。顔の形をぎざぎざにして、口を飛び出すようにしました。色をていねいにぬりました。

ることで、違いを認めることが、物事をスムーズに運び、いさかいを防ぐことにつながるのではないのでしょうか。相手の思いを聴いてみると、そういうことだったのかと納得できたり、相手の良さにふれたりすることがありませんか。喧嘩をしても、失敗をしても、そこを何度でもやり直すことができるのが、学校の良さだと思っています。過ちを、やり直し、友達との関係を結び直しながら前に進んでいくことで、多様な価値を学んだり、自分や友達の良さに気づいたりしていきます。トラブルが起こったとき「子どもにとっても、私にとってもピンチではなくチャンスだ。」と思えるようになったできごとでした。

「変化を肯定的にとらえたい」

とある大学

付属小学校の

先生に、「この

世の中が、ど

れくらいのス

ピードで変化

しているか、

先生方お分か

りですか？」

と質問されまし

た。その例とし

て、小学三年生で学ぶ「昔のくら

し」という題材を挙げられました。

昔の道具について調べたことを発

表会する準備をしている時に、あ

るグループの子どもたちが「先生、

段ボールください。」と言ってきた

たそうです。そして、子どもたち

が段ボールでつくった「昔の電話」

が何と「ガラケー」だったという

のです。この三年生にとって、は

ガラケーはすでに昔の使わなくな

なった道具だったのです。さらに、

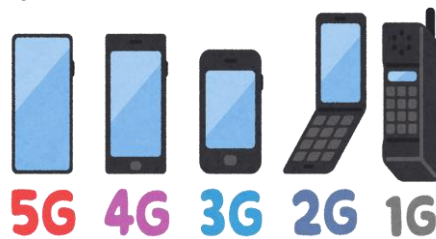
「黒い電話なんて想像できない。」

と子どもたちは言っていたそうです。

衝撃的な出来事だったとおっ

しゃっていました。

スマホも登場して十年余りにな



りますが、「十年一昔」。次世代

スマホも開発されているようです。

最近では、子どもに対しても、平成

生まれの先生にも、渾身のダジャ

レが通じないことがあります。若

い先生からは「先生、昭和ですね。」

と言われます。時代についてい

てないのかなあと寂しく感じる一

方、若い先生方と話していると、

これからはこの先生たちの時代な

のだと頼もしく感じます。

この先生たちの羽ばたきに関わ

る仕事をさせていただいているこ

とは、ありがたいことだと思いま

す。若い先生たちが、どんどん力

を付けている様子にふれると、そ

こで学ぶ子どもたちもきつと想像

を超えるような素晴らしいことを

やってくれるだろうと期待が膨ら

みます。

この数か月、新型コロナウイルス

ス感染予防のため制約が増えまし

た。私たちの生活も随分変わりました。

コロナの問題が大きかった

三月から六月にかけて、子どもた

ちは学校に行くことができません

でした。その時、子どもは家でど

んな生活を送っていたのでしよう

か。世間では暗い話題が多い中、

中には、学校ではできないことを

考えて挑戦したり、自由な発想で

研究をしたりしていた子どももい

たようです。教師の発想を超えて

新たなチャレンジをしていく子ど

もたちがこれからどんな未来を

創っていくのだろうか、これから

どんな世界を生きていくのだろうか

と考えた時、希望で胸が熱くなり

ます。

最近、一人キャンプというのが

はやっているようです。不自由な

環境の中で自分の知恵や知識を組

み合わせて、試してみることにそ

の面白さなのではないでしょうか。

これからの変化の大きな時代を生

きていく子どもたちにも、知恵を

出して新たな局面を乗り越えてい

くことを面白がるたくましさを身

に付けてほしいと思います。

学校での学びを通してたくまし

さと優しさを育てるのが、教師の

役割です。しかし、教師だけでは

未来を創る子どもを育てることは

できません。教師と保護者、そし

て地域の皆さんの協力、結合が

あって初めて達成できうることだ

と思います。

教員研修を担う倉敷教育セン

ターですが、コロナ禍の中、思う

ように事業が進んでいません。先

生方にぜひ受けていただきたいと

計画した研修も、短縮したり中止

したりと残念な思いです。しかし、

「ピンチはチャンス」この状況だ

からこそチャレンジできることも

あるのではないかと、オンライン

によるミーティングや、画像配信

による研修などにも挑戦してみ

ています。未来の創り手応援団の一

員として、これからも、先生方、

保護者の皆さま、地域の方々にと

もに、変化を恐れず自分にできる

ことを探し続けてまいりたいと思

います。

自動運転の車が走る時代なんて、

少し前までは想像もつきませんでした。

した。AIが進化すること、今

後十年で、今ある職業の約半分が

消滅するという予測も出ています。

私たちには、思いもよらない職業

がどんどん登場し、新しい時代が

つくられていきます。目の前の子

どもたちが、これからどんな職業

を見つけ、自分らしさを発揮して

いくのか、楽しみでたまりません。

(おわり)

